

【十月の言葉（平成三十年）】

みな金銭のことで悩んでいる。
いつも欲のために追い回されて、
少しも安らかな時がないのである。

「^{まず}貧しい人とは、少ししか物を持っていない人ではなく、無限の欲望があり、いくら手に入っても満足しない人のことだ」との先人の言葉があります。人間の行為は今も昔も変わりなく、愚かさの中で苦悩しています。これが迷いの凡夫^{ほんぶ}、私の姿です。

どの時代であれ地域であれ、人間はみな「しあわせ」な生活を望み、その実現に向けて励んでいます。科学技術の進歩や市場経済・消費経済の発展で、物は豊かになり社会は便利になったのかもしれませんが。しかし、本当に「しあわせ」になったのでしょうか。

私たち人間は自己中心的な自己を省みず、利己的な欲望の中で足ることを知らず、貪り^{むさぼ}続けています。そこには、感謝を忘れ、不安と不満ばかりの苦悩するいのちの営みしかありません。

人間の貪欲^{どんよく}という心を見つめ、それを転じる営みが必要です。それが、「^{しょうよくちそく}少欲知足（欲を少なくして足ることを知ること）」です。